

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	半谷 芳文
論文題目	奈良末・平安初期の漢詩の研究―勅撰三漢詩集を中心として―
<p>審査要旨</p> <p>九世紀初頭の日本においては、嵯峨天皇および淳和天皇の勅撰により三部の漢詩集、すなわち『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』が編纂された。本論文は、これら勅撰三漢詩集を考察対象の中心として、これに先立ち天平勝宝三年(751)に編纂された日本現存最古の漢詩集『懷風藻』、および平安初期頃成立の『雑言奉和』をも取り上げ、中国の詩文や思想、政治的志向などから多大な影響を受けた奈良末・平安初期の日本において、これらの漢詩集が中国のものといかに重なり、同時にまたいかなる独自性を表出しつつ成立したものであったかを辿る。そして、漢詩制作の実態や漢詩集が編纂されることの意義を明らかにしつつ、唐朝を中心とする東アジア漢詩文圏のなかに、奈良末・平安初期の漢詩の特質を位置付けようとするものである。</p> <p>本論文においては、冒頭の序論において、勅撰三漢詩集の基盤にある「詩と政治」、「中国先行作品に対する著しい規範意識」、「作詩の二種のタイプ(A. 現政治・為政者を賞賛するタイプとB. 個々の事情を切り離して詩的情感のみを詠じるタイプ)」という前提事項が示され、また考察を進めるための柱として、「総集」「抒情」「韻律」という、三つの視角を設けることが述べられる。考察対象とする漢詩集はいずれも、複数の作者による詩文を収載する「総集」と称される作品であるが、そのうちとりわけ勅撰三漢詩集においては、詩文を政治と関係づけ、国家の地位や威信の発現と重ね合わせて捉える、中国伝統の「文章経国」思想が通底している。しかしながら、勅撰三漢詩集においては、為政者を称賛する政治的志向を反映する表現とともに、中国の詩文とは傾向の異なる豊かで細やかな「抒情」性を指摘できるものもある。また、『懷風藻』や勅撰三漢詩集所収の漢詩の句法や押韻など、「韻律」に注目することにより、当該時期の日本漢詩における中国的規範への意識とともに、そこから乖離していく様相をも抽出しうる。本論文は、奈良末・平安初期になにゆえ漢詩が作成され、なにゆえそれが勅撰漢詩集という形をとってまとめられたのか、その根本的な意義を捉え直そうというダイナミックなビジョンのもと、緻密に練り上げられた構成ときわめて丁寧な読みや分析によって、巧みに論述が展開し、それが着実な層をなして積み上げられ、一つの大きな体系を示すことに成功している。当該時期の日本の漢詩に対してはこれまでも研究の蓄積はあるものの、日本文学研究全体からみれば日本漢詩文の注釈や研究は決して多いとは言えない。本論文はそうした当該領域の研究史に照らしてみても、大きな意義をもつものである。</p> <p>以下、本論文の概要を順に述べる。</p> <p>本論文は五章よりなる。第一章「勅撰三漢詩集の編纂意義とその文芸観」は、合計四節の論考から構成される。第一節では、勅撰三漢詩集が、律令国家としての文化的優越性を国内外に示すために編纂されたこと、それゆえそこには「文章経国」的文芸観が意図的に貫かれたこと、そうした中『文華秀麗集』に「艶情」の類題が立てられたのは「四季と恋との世界を愛惜する」日本的特質の自覚とその現れであったと述べる。第二節では、『懷風藻』と勅撰三漢詩集の体例を観察し、『懷風藻』と『凌雲集』は作者への意識が強く、作者別に分類する編制であるのに対し、『文華秀麗集』と『経国集』は類題別の編集となっており作品の文芸性を重視していること、そして以後の平安朝の総集は全て類題別の編集となっていくことが述べられる。続く第三節では、「文章経国」的文芸観が初唐・康頭貞の『詞苑麗則』序に見えるものであり、勅撰三漢詩集と初唐の総集とのつながりが指摘される。さらに第四節では、勅撰三漢詩集所収の閨怨詩や楽府詩の抒情においても「文章経国」的文芸観が看取されるという、中国作品にはない特徴が存することに言及する。</p> <p>第二章「勅撰三漢詩集の抒情的特質」は、合計五節の論考と補説から構成される。第一節から第三節は、『文華秀麗集』艶情の部の「奉和春閨怨」詩を取り上げ、一人称による虚構性を含む叙述が古楽府を受容したものであること、しかしながら中国の先行作品にみられる政治への不満など為政者の権威を貶めるような要素は削除されていること、駱賓王「艶情」と比較すると女の苦悩ではなく艶美を描き出しているところに独自の特徴</p>	

があることを指摘する。第四節では、『雑言奉和』所収「落花詞」を取り上げ、自然と人事とを融合して耽美的・唯美的抒情世界を作り上げる嵯峨詩壇の特徴を指摘する。また第五節では、『経国集』重陽節神泉苑、賦秋可哀」を取り上げ、秋景を具象的に詠ずる点で西晋・夏侯湛「秋可哀」に重なることを見出し論じる。

第三章「本朝文章生試における貢挙進士試の雑文（詩賦）の試験の受容と展開」は、二節より成る。まず第一節では、八世紀に大学寮に新設された文章科と文章生試についての基礎的な情報を、唐との比較とともに整理していく。例えば唐の貢挙進士科の試験では詩賦がともに出題されたのに対して、日本では詩のみが出題された。また第二節では、『経国集』所収の試帖詩の試卷式と程限について考察し、基本的には唐の形式が日本でも継承されているものの、唐では例を見ない七言詩が出題されていることを特徴として指摘する。

第四章「平安朝七言排律詩盛行の淵源としての勅撰三漢詩集」は、三節から成る。ここで明らかにされるのは、平安朝の詩において七言排律詩の割合が8%を超えること、それは七言排律詩がほとんどみられない唐詩と比べて際立った特徴であること、一方平安朝では、文章生試においても七言排律詩がしばしば出題されており、それによって詩文創作に携わる平安朝漢詩人の間で七言排律詩を制作する共通の基盤が醸成されたと考察する。

第五章「奈良・平安初期の日本漢詩における押韻と韻書」は二節から成る。第一節では、勅撰三漢詩集の押韻について、従来の研究では『切韻』の規定に合わない押韻は「唐代の古詩通押韻」あるいは「ケアレス・ミス」と解釈されてきたが、それらは『切韻』に統一される以前の六朝韻書を使用したためであることを明らかにする。勅撰三漢詩集は六朝の韻書と『切韻』を混用していたのであった。また第二節では、『懷風藻』の押韻が六朝の韻部分類と『切韻』によること、また一部は日本漢字音「呉音」による押韻も存することを指摘する。

以上、五章にわたる論考を受け、最後の「結論」においては、各章における考察を総括し、簡潔に要約したうえで、勅撰三漢詩集は中国の漢詩の様式を吸収・保持するとともに、部分的にはそれを選択・排除し、独自の抒情表現をも実現したものであると位置付ける。

公開審査会においては、重厚で緻密な論考の内容や方法が高く評価された。その一方で、例えば「日本人生得の詩的感性」といった論述における「感性」という語の含意や、鍵語として使用されている「文芸観」といった語について、さらに踏み込んだ説明がほしいという要求も出た。また、奈良末・平安初期の漢詩の韻律を、六朝から初唐にかけて行われていた韻律との関係から解き明かす部分について、着実な論証を経た考察として首肯されるものではあるが、それでは当時日本では六朝詩や初唐の詩がどれほど時間差のあるものとして捉えられていたのだろうか、といった疑問も出された。しかしながらこうした要求や疑問は、本論文が従来の研究成果を超えて明らかにした新たな考察結果を知るからこそ湧いてくるものである。本論文が当該研究領域の進展に多大な貢献を果たすものであることは疑いない。

本論文は、個別の詩に対する注釈作業や、個別の作品への視点からのみでは達成し得ない、奈良末・平安初期の文学の生成と展開を、ダイナミックに捉え、語ることに成功している秀逸なものである。よって、審査委員会は全員一致で、博士学位の授与にふさわしい論文であると判断した。

公開審査会開催日	2019 年 9 月 13 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	河野 貴美子	和漢比較文学	博士(早稲田文学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	陣野 英則	平安時代文学・物語文学	博士(早稲田文学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	高松 寿夫	日本上代文学	博士(早稲田文学)
審査委員				
審査委員				